



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 次子出生における長子の変化としての葛藤反応：長子や次子の性別・年齢差・気質との関連から(fulltext) |
| Author(s) | 深澤, 怜紗; 岩立, 京子 |
| Citation | 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64(1): 85-94 |
| Issue Date | 2013-02-28 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/132587 |
| Publisher | 東京学芸大学学術情報委員会 |
| Rights | |

次子出生における長子の変化としての葛藤反応

—— 長子や次子の性別・年齢差・気質との関連から ——

深澤 怜紗*・岩立 京子**

幼児教育学分野

(2012年9月14日受理)

1. 問題と目的

子どもが育つ過程において、同居する家族の影響が強いことは言うまでもない。そのなかでも、子どもにとって、きょうだいの存在は、性格形成や対人関係の発達に大きな影響を及ぼすと考えられる(磯崎¹⁾、依田⁹⁾)。それは、きょうだい、親よりも自分に年齢が近い、遊びや生活を共有しやすく、そのなかで様々な行動を学ぶモデルとなったり、きょうだいげんか、嫉妬など、対等な立場で対立や葛藤を生み出す相手となったりするからであろう。

きょうだい関係は、長子が次子の存在に気づく妊娠期から形成されると考えられるが、次子出生時は、長子にとって大きな意味をもつ瞬間である。長子は弟妹の誕生によって、自分に向けられる両親の愛情が減じたと感じることから、弟妹に対して嫉妬心を抱くようになる。この嫉妬心から長子に退行現象(「赤ちゃん返り」)が生じることがある。特に、長子は「出生来ずっと家族の愛情と注目の対象の中心であり、王者であった」²⁾。次子の出生は、それまでの長子の存在を突然おびやかす、長子にとって予測し難い不安や不快感情を引き起こす要因となる。次子ただ一人の誕生によって、長子は外的にも内的にも大きく変化するのである。こうした背景から、次子の出生をきっかけに、長子は下のきょうだいに対する葛藤の表れとして、「赤ちゃん返り」を示すことがある。長子の「赤ちゃん返り」は、出生当初から上のきょうだいがいる次子以降のそれとは異なり、それまで両親と自分だけの関係を築いていた長子特有の危機と言える。ゆえに、次子出生による長子の葛藤と、次子以降の葛藤では質的

に異なるものであることが考えられる。そして、このような長子の心理的葛藤は、いわゆる「赤ちゃん返り」その他の行動の変化につながっていくと考えられる。

一般に「赤ちゃん返り」と呼ばれる現象は、心理学分野においては「退行」という言葉で表現されることが多い。「退行」について『新教育心理学基本用語辞典』³⁾では、「発達によってすでに卒業したはずなのに再び未熟な振る舞いに逆戻りする現象」であり、「弟妹が生まれると第一子は、母親の愛情を奪われたと不満に感じ」て、いわゆる「赤ちゃん返り」の現象が見られるとしている。天富²⁾は、退行現象を含む、次子出生時の長子の変化について「同胞葛藤」という語を用いた。「長子は出生来ずっと家族の愛情と注目の対象の中心で」あったが、次子出生によって「その存在が急におびやかされることによって長子は予測し難い不安や不快感情が発生」して葛藤状態に陥り、「多くの行動上の変化が惹起される」とし、こうした次子の出生によって引き起こされる長子の葛藤状態を「同胞葛藤」と呼んだ。そして、その葛藤反応の中には、「赤ちゃん返り」という言葉から想起されるような否定的な反応だけでなく、「ききわけがよくなった」などの肯定的な反応も含まれている。次子の出生をきっかけとした長子の変化には、以前の段階に戻ったり、次子に攻撃したりするなどのネガティブな反応だけではなく、自立・発達に向かうようなポジティブな反応も見られるはずである。ゆえに、本研究では、「赤ちゃん返り」とされる否定的な反応だけではなく、肯定的な反応も含めた次子出生による長子の変化すべてを「葛藤反応」ととらえる。以上のことを踏まえ、本研究では、母親の妊娠期を含む次子出生前後の長子

* 東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

の状態を「葛藤状態」であるとし、「赤ちゃん返り」は、長子の葛藤による変化の一つとみなす。ここでの「葛藤」とは、次子の出生によって両親からの愛情の危機に陥る一方で、新たな家族の一員として次子を受け入れたいという思いを抱くという、次子の出生をきっかけとした長子の心理的揺れ動きを指す。この葛藤は「赤ちゃん返り」などの行動の変化として表れるが、それを両親に受けとめられることで、長子は次子を含めた新たな家族システムを構築・受容していく。一方、受けとめられなかった長子は葛藤が未処理のままとなり、次子の存在を受け入れることができずに次子に怒りや敵対心を抱いたり、心理的な問題を抱えたりすることが考えられる。

天富²⁾によれば、次子の出生をきっかけとした長子の変化について、最も発現頻度の高い項目では94.1%の幼児にその反応が見られた。このように、「赤ちゃん返り」は決して問題ある子育てによるものや病理などではなく、どのような幼児にも見られる可能性のある現象である。また、公的機関において発行される母子手帳に「赤ちゃん返り」についての記述があることや、育児関連企業などが運営するウェブサイトでもわかりやすい言葉を用いて説明していることから、一般的にみられる行動といえる。しかし、反面、親には子どもの気になる変化、心配な行動と捉えられやすく、「赤ちゃん返り」に関する相談が少なからず挙げられていることが推測される。

「赤ちゃん返り」とされる行動や態度は一律ではなく、その幼児によって異なるものである。よって、幼児の特性と「赤ちゃん返り」の特徴との関連を明らかにすることは、幼児やその親、あるいは養育・保育をおこなう者にとって、重要な知見となると考える。本研究では、長子の「赤ちゃん返り」に焦点を当て、次子出生による長子の変化から、長子はどのような葛藤反応を示すのか、長子・次子の性別や、長子と次子の年齢差、長子の気質との関連を検討しつつ、明らかにしていく。

2. 仮説

天富¹⁾は、葛藤反応項目から抽出した6因子と長子の性別、次子の性別との関連を検討し、長子が女兒であることは「依存・情緒統制未熟」因子と、次子が男児であることは「次子への攻撃」因子と関連があることを明らかにした。また、年齢差について、2歳未満群と2歳以上群に分けて葛藤反応の6因子との関連を検討し、2歳以上群は「排尿習慣退行」と、2歳未満群は「摂食習慣退行」と関連があることを明らかに

した。さらに、天富^{2),4)}は、「赤ちゃん返り」に関する自身の研究において長子の反応ときょうだい関係や親の養育態度との関連を検討しているが、幼児自身の持つ内的特性、つまり気質については検討をおこなっていない。そこで、本研究では性別、年齢差とともに、長子の気質についても検討し、どのような幼児がどのような葛藤反応を示すのかを明らかにする。以上のことから、長子の葛藤反応と、長子・次子の性別、長子と次子の年齢差、幼児の気質について、3つの仮説を設定する。

仮説1 長子・次子の性別、きょうだい構成によって長子の葛藤反応が異なる。

仮説2 長子と次子の年齢差によって長子の葛藤反応が異なる。

仮説3 長子の気質によって葛藤反応に違いが見られる。

3. 研究方法

3. 1 研究対象

東京都にある幼稚園に通う幼児をもつ母親のうち、子どものきょうだい数2人以上の母親を対象とした。

3. 2 研究時期・手続き

2010年10月から11月にかけて、幼児をもつ母親を対象に質問紙調査をおこなった。個別に記入し、所定の回収箱に投函あるいは担任教師に提出するよう求め、186部が回収された。子どものきょうだい数が1人(ひとりっこ)の家庭からも回収されたが、今回の調査では対象としなかった。有効回答は146であった(有効回答率78.49%)。子どものきょうだい数はそれぞれ、2人きょうだい105(72.4%)、3人きょうだい34(23.4%)、4人きょうだい6(4.1%)であった。長子の年齢は平均8歳0ヶ月(月齢96.88, SD=36.21, 43-268)、次子の年齢は平均4歳8ヶ月(月齢56.14, SD=28.92, 1-147)であった。長子の性別は、男児81(55.9%)、女児64(44.1%)であり、次子の性別は、男児68(46.9%)、女児72(49.7%)、不明5(3.4%)であった。母親の年齢は平均37.54歳(SD=4.25, 24-50)であった。

3. 3 尺度の検討

3. 3. 1 「葛藤反応」について

「葛藤反応」は、天富²⁾が作成した葛藤反応項目のうち29項目を用いる。天富²⁾は、日常の育児相談や健康診断において実際に母親から訴えられる反応をもとに、これらに検討を加えて選択をおこない、項目を

作成した。項目には、「赤ちゃん返り」とされるようなネガティブな反応だけでなく、「ききわけがよくなった」「赤ちゃんを可愛がる」などのポジティブな反応も含まれ、長子の葛藤による行動的变化を全般的に調べる項目として適切であると考えられる。また、天富⁴⁾は、この葛藤反応から因子分析によって抽出された6因子を用いて母親の予備知識や次子出生の予告、養育態度との関連を報告していることから、本研究において他の要因との関連を見る上で適当な項目であると言える。項目内容は指導教員と吟味して一部修正を加えた。それぞれの項目について「見られた」「やや見られた」「あまり見られなかった」「見られなかった」の4件法を用いて尋ねる。

3. 3. 2 「幼児の気質 (フラストレーション・トレランス, 反応の激しさ)」について

「幼児の気質」は、菅原ら⁵⁾の日本語版TTS (Toddler Temperament Scale) の下位尺度「フラストレーション・トレランス」「反応の激しさ」から計15項目を用いる。戸田⁶⁾は、菅原ら⁵⁾の7因子をカテゴリーとして利用し、独自に逆転項目を設定した。これを参考に、本研究では、「反応の激しさ」のうちの2項目(4, 15)を逆転項目とした。また、項目内容は指導教員と吟味して内容が類似しているものは除外し、その他の項目は一部修正を加えた。8項目から「フラストレーション・トレランス」得点を、7項目から「反応の激しさ」得点を算出する。それぞれの項目について「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法を用いて尋ねる。

4. 結果

4. 1 「葛藤反応」について

葛藤反応29項目に対して、「見られなかった」に1点、「あまり見られなかった」に2点、「やや見られた」に3点、「見られた」に4点を与えた。葛藤反応29項目について主因子法による因子分析をおこなったところ、スクリープロットにより4因子が抽出された。プロマックス回転後に、どの因子にも低い負荷量(±.35以下)を示した4項目(「指を吸うようになった」「爪かみをするようになった」「身の回りのことを自分でするようになった」「やたらと食べたがるようになった」)を除外して再度分析をおこなったところ、4因子が抽出された(Fig.1)。第1因子に高い負荷を示した項目(.35以上)は、「赤ちゃんを押しつけて抱かれようとする」「『私も抱いて』『私とも遊んで』と言う」などの9項目で、「嫉妬」因子と命名した。第

2因子に高い負荷量を示した項目(.35以上)は、「自分でできていたことを他人に頼む」「おむつがとれていたのに又おもらしをする」などの9項目で、「退行」因子と命名した。第3因子に高い負荷を示した項目(.35以上)は、「赤ちゃんを可愛がる」「『赤ちゃんなんかいない』と言う」などの4項目で、「アンビバレント」因子と命名した。第4因子に高い負荷を示した項目(.35以上)は、「よく嘔吐するようになった」「母にあたる」などの3項目で、「自己アピール」因子と命名した。これらの4因子について、それぞれクローンバックの α 係数を算出したところ、第1因子は $\alpha=.785$ 、第2因子は $\alpha=.784$ 、第3因子は $\alpha=.662$ 、第4因子は $\alpha=.542$ であった。葛藤反応尺度29項目の得点の合計を葛藤反応得点とした。また、抽出された4因子について因子得点を算出し、それぞれを嫉妬得点、退行得点、アンビバレント得点、自己アピール得点とした。

4. 2 「幼児の気質」について

幼児の気質15項目に対して、「あてはまらない」に1点、「あまりあてはまらない」に2点、「ややあてはまる」に3点、「あてはまる」に4点を与えた。戸田⁶⁾より、幼児の気質尺度のうち8項目を「フラストレーション・トレランス」尺度とし、7項目を「反応の激しさ」尺度として、クローンバックの α 係数を算出した。「フラストレーション・トレランス」は $\alpha=.859$ 、「反応の激しさ」は $\alpha=.508$ であった。それぞれの尺度での項目の得点の合計を、フラストレーション・トレランス得点、反応の激しさ得点とした。

| 因子名 | 項目 | 因子 | | | |
|---------|-------------------------|-------|-------|-------|-------|
| | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 嫉妬 | 7.よく泣くようになった | .738 | -.223 | .120 | .088 |
| | 13.赤ちゃんを押しつけて抱かれようとする | .726 | .110 | -.084 | -.069 |
| | 6.「私も抱いて」「私とも遊んで」と言う | .612 | .224 | .007 | -.115 |
| | 17.哺乳瓶に入れないとミルクを飲まなくなった | .549 | -.175 | .300 | .360 |
| | 10.「お母さんは私のお母さん」と言う | .508 | -.008 | -.263 | -.003 |
| | 4.赤ちゃんをいじめる | .481 | -.014 | -.124 | .128 |
| | 19.弱いものいじめをするようになった | .444 | .051 | -.025 | .265 |
| 退行 | 2.赤ちゃんの玩具をとりあげる | .386 | .060 | -.299 | .151 |
| | 15.自分にもお乳をのませてほしいという | .378 | .013 | .301 | -.050 |
| | 18.自分でできていたことを他人に頼む | .082 | .655 | -.004 | -.117 |
| | 21.夜尿がひどくなった | -.168 | .606 | .174 | .073 |
| | 28.今までより甘えた言葉遣いになった | .140 | .581 | .305 | .127 |
| | 26.今までより食べなくなった | -.056 | .564 | .049 | .186 |
| | 20.おむつがとれていたのに又おもらしをする | -.188 | .500 | .193 | .223 |
| アンビバレント | 24.よくまとわりつくようになった | .371 | .496 | .013 | -.171 |
| | 27.落ち着きがなくいらしていた | -.130 | .463 | -.340 | .353 |
| | 1.今までより言うことをきかなくなった | .273 | .418 | -.251 | -.123 |
| | 22.母以外に甘える | .111 | .386 | .111 | -.070 |
| | 14.赤ちゃんを可愛がる | -.024 | .258 | .725 | -.133 |
| | 25.赤ちゃんの世話をしたがる | .033 | .201 | .662 | -.133 |
| | 9.「赤ちゃんなんかいない」と言う | -.047 | .035 | .461 | .110 |
| 自己アピール | 12.急にききわけがよくなった | -.002 | .044 | .421 | .252 |
| | 11.よく嘔吐するようになった | .157 | -.115 | .077 | .641 |
| | 29.腹が立つと母以外の人物や物にあたる | -.090 | .198 | -.047 | .617 |
| | 16.母にあたる | .210 | .189 | -.028 | .396 |

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

Fig. 1 葛藤反応項目の因子負荷量

4. 3 要因の検討

4. 3. 1 長子の性別・次子の性別

因子分析によって抽出された4因子(「嫉妬」因子, 「退行」因子, 「アンビバレント」因子, 「自己アピール」因子)それぞれの因子得点について, 長子の性別と次子の性別を要因として, 被験者間(2)×被験者間(2)の2要因分散分析をおこなった(Table 1)。その結果, 「アンビバレント」因子に関して, 長子の性別について1%水準で有意な主効果が見られ($F(1) = 15.099, p < .01$), 女兒が男児より有意に高かった。また, 次子の性別について5%水準で有意な主効果が見られ($F(1) = 4.597, p < .05$), 女兒が男児より有意に高かった。「嫉妬」因子, 「退行」因子, 「自己アピール」因子に関しては長子・次子の性別について有意な主効果は見られなかった。さらに, 4因子すべてにおいて有意な交互作用は見られなかった。

以上のことから, 仮説1「長子・次子の性別・きょうだい構成によって長子の葛藤反応が異なる」は支持されることが明らかになった。

4. 3. 2 長子と次子の年齢差

長子と次子の年齢差について, 年齢差24ヶ月未満を1歳群, 年齢差24ヶ月以上36ヶ月未満を2歳群, 年齢差36ヶ月以上48ヶ月未満を3歳群, 年齢差48ヶ月以上60ヶ月未満を4歳群, 年齢差60ヶ月以上を5歳以上群とした。因子分析によって抽出された4因子(「嫉妬」因子, 「退行」因子, 「アンビバレント」因子, 「自己アピール」因子)それぞれの因子得点について, 長子と次子の年齢差を要因として, 1要因分散分析をおこなった。その結果, いずれの因子についても有意な主効果は見られなかった。

以上のことから, 仮説2「長子と次子の年齢差によって長子の葛藤反応が異なる」は支持されないことが明らかになった。

4. 3. 3 長子の気質

フラストレーション・トレランス得点の平均値をもとに低群と高群に分け, 葛藤反応得点について対応のないt検定をおこなったところ, 低群と高群との間に有意な差は見られなかった。抽出された4因子の因子得点について, 低群と高群で対応のないt検定をおこなった(Table 2)。その結果, 「退行」因子に関して5%水準で有意差が($t(132) = 2.143, p < .05$), 「自己アピール」因子に関して, 5%水準で有意差が見られ($t(86) = 2.221, p < .05$), 低群が高群より有意に高かった。また, 「アンビバレント」因子に関して, 1%水準で有意差が見られ($t(132) = 4.705, p < .01$), 高群が低群より有意に高かった。「嫉妬」因子に関し

ては低群と高群との間に有意な差は見られなかった。

反応の激しさ得点の平均値をもとに低群と高群に分け, 葛藤反応得点について対応のないt検定をおこなったところ, 低群と高群との間に有意な差は見られなかった。因子分析によって抽出された4因子の因子得点について, 低群と高群で対応のないt検定をおこなった(Table 3)。その結果, 「アンビバレント」因子に関して, 5%水準で有意差が見られ($t(131) = 2.463, p < .05$), 低群が高群より有意に高かった。「嫉妬」因子, 「退行」因子, 「自己アピール」因子に関しては, 低群と高群の間に有意な差は見られなかった。

以上のことから, 仮説3「長子の気質によって葛藤反応に違いが見られる」は支持されることが明らかになった。

Table 1 分散分析表 アンビバレント因子
(長子の性別×次子の性別)

| 要因 | 平方和 | 自由度 (df) | 平均平方 | F | p |
|------|---------|----------|--------|--------|-----------|
| 長子性別 | 10.600 | 1 | 10.600 | 15.099 | $p < .01$ |
| 次子性別 | 3.227 | 1 | 3.227 | 4.597 | $p < .05$ |
| 交互作用 | 0.152 | 1 | 0.152 | 0.216 | n.s. |
| 誤差 | 87.751 | 125 | 0.702 | | |
| 全体 | 102.061 | 129 | | | |

Table 2 フラストレーション・トレランスのt検定

| | 低群 (N=51) | | 高群 (N=83) | | t 値 | 自由度 | 有意確率 (両側) |
|-----------|-----------|-------|-----------|-------|-------|-----|--------------|
| | 平均値 | 標準偏差 | 平均値 | 標準偏差 | | | |
| 嫉妬因子 | 0.098 | 0.842 | -0.060 | 0.981 | 0.959 | 132 | 0.339 |
| 退行因子 | 0.214 | 0.922 | -0.132 | 0.896 | 2.143 | 132 | 0.034* |
| アンビバレント因子 | -0.430 | 0.941 | 0.264 | 0.753 | 4.705 | 132 | 0.000** |
| 自己アピール因子 | 0.221 | 0.983 | -0.136 | 0.757 | 2.362 | 132 | 0.020** |

* $p < .05$, ** $p < .01$

Table 3 反応の激しさのt検定

| | 低群 (N=86) | | 高群 (N=47) | | t 値 | 自由度 | 有意確率 (両側) |
|-----------|-----------|-------|-----------|-------|-------|-----|--------------|
| | 平均値 | 標準偏差 | 平均値 | 標準偏差 | | | |
| 嫉妬因子 | -0.075 | 0.849 | 0.159 | 1.055 | 1.391 | 131 | 0.167 |
| 退行因子 | 0.000 | 0.987 | 0.073 | 0.782 | 0.611 | 131 | 0.542 |
| アンビバレント因子 | 0.135 | 0.845 | -0.257 | 0.937 | 2.463 | 131 | 0.015* |
| 自己アピール因子 | -0.115 | 0.619 | 0.226 | 1.167 | 1.864 | 60 | 0.067 |

* $p < .05$

5. 考察

5. 1 葛藤反応について

葛藤反応29項目について因子分析をおこなったところ、4因子が抽出された。第3因子と第4因子でクロンバック α 係数が低いのは、それぞれの因子に高い負荷量を示した項目の数が、第3因子で4項目、第4因子で3項目と少なかったためだと考えられる。しかし、どちらも $\alpha=500$ を上回っていたため、今回の調査ではこの2因子も含めた4因子を採用して分析をおこなった。今後、今回抽出された因子で尺度を作成する際は、この2因子については新たな項目を加えるなどの検討が必要である。また、因子分析によって見出された因子の分散の累積率は100%に至るまで緩やかに推移しており、末端の因子にもある程度の寄与率があることを示している。今回の調査で抽出された4因子では全体の40%が解釈されるに過ぎず、他の因子によって説明される余地は充分にあるだろう。これは天富²⁾と同様の結果で、「葛藤反応の多彩さを物語」²⁾ っており、多くの因子が反応形成に関与していると考えられる。

これ以降では、第3因子の「アンビバレント」因子について述べる。良い子に振る舞うということが、「大人の期待に沿うための葛藤や我慢、不安や緊張といった複雑な心理が潜んでいる」⁷⁾ ように、「アンビバレント」因子の抽出によって、長子は次子に肯定的に接する反面、やはり嫉妬心や危機感を抱いているということがよくわかる。その否定的な思いを抱えながらも、親の期待にこたえたいなどの思いから、次子を積極的に受け入れようとしていることがうかがえる。長子は、次子の出生による危機状態の中で、「アンビバレント」因子に象徴されるような葛藤を抱えていることがわかった。富田⁷⁾ が、長子は一生懸命我慢してお兄さん・お姉さんらしく振る舞う一方、その反動が別の形で現れることがあると述べていることから、葛藤反応において、肯定的反応と否定的反応は両極概念ではなく、幼児の中で共存するものであると言える。また、次子をかawaiiがるという行動を取りながらも、自分の不安感や危機感を抑制しきれずに「赤ちゃんなんかいない」と言うところは、実に幼児らしい反応であると思われる。大人であれば、たとえ自分の思いと違っていても、社会的に良いとされている方法で振る舞うことができるだろう。幼児は、親が次子をかawaiiく思って世話をしているのを見るなどして、自分なりに次子をかawaiiがるなどの肯定的な反応を見せる。しかし、時には思いを抑制しきれずに、そ

れを表出してしまうのだろう。幼児なりに努力はしているが、やはり、自分の思いが溢れ出てしまうことがある。これは、親の期待にこたえたいというけなげさと、大人とは異なる素直さを、幼児が持っているためであろう。

5. 2 要因の検討について

子どもの性別に関して、長子の性別と次子の性別を要因とした分散分析により、4因子の因子得点との関連を検討したところ、すべての因子において、有意な交互作用は見られなかった。天富²⁾ は、きょうだいの性別構成による葛藤反応との関連が、6因子（「依存・情緒統制未熟」「次子への攻撃」「排尿習慣退行」「焦燥易怒」「発達・自立」「摂食習慣退行」）のいずれとも有意ではないことを示している。本研究においても天富²⁾と同様の結果が示され、きょうだい構成が特定の葛藤反応と結びつくわけではないということが明らかになった。天富²⁾ は対象を3～4歳に限定したために、このような結果になったと考察しているが、本研究の結果が示すように、対象年齢の幅が広がっても、同様の結果が認められた。したがって、次子出生による葛藤反応は、きょうだい構成に影響されるのではなく、長子自身の気質など、他の要因が影響すると考えられる。主効果では、「アンビバレント」因子のみが、長子の性別、次子の性別ともに有意であり、女兒の方が男児より有意に高いことが示された。「アンビバレント」因子に高い負荷量を示した4項目（「赤ちゃんを可愛がる」「赤ちゃんの世話をしたがる」「『赤ちゃんなんかいない』と言う」「急にききわけがよくなった」）を見ると、時には兄姉らしく振る舞い、時には次子の存在を否定するように、次子に対する肯定的な思いと否定的な思いの両方がうかがえる。受け入れたいという肯定的な面と、受け入れられないという否定的な面の両局面の反応が男児よりも女兒に見られることは、天富²⁾による研究結果とも一致している。富田⁷⁾ もまた、次子出生の際に、長子が良い子を演じるという葛藤は女兒に多く見られる傾向であると述べている。また、次子が女兒の場合にも、長子の「アンビバレント」因子との関連が示された。張⁸⁾ は、幼児の攻撃行動の性差についての研究で、女兒の方が男児より身体的攻撃にあいにくいことを明らかにしている。このことを踏まえると、長子は、次子が男児の場合よりも女兒の場合の方がかawaiiがるなどの肯定的な反応で次子に接することがわかる。しかし、「『赤ちゃんなんかいない』と言う」という項目が示すように、次子の存在を受け入れきれない思いを、次

子への攻撃とは異なる方法で表していると考えられる。「嫉妬」因子、「退行」因子、「自己アピール」因子に関しては、長子・次子の性別との関連は見られなかった。張⁸⁾は、男児には、身体的攻撃をおこなった子どもが多いことや、身体的攻撃を受けた子どもが多いことを明らかにしている。しかし、本研究の結果において、長子が男児であることや、次子が男児であることと、攻撃的な内容の項目（「赤ちゃんをいじめる」「赤ちゃんの玩具をとりあげる」など）が高い負荷量を示した「嫉妬」因子との有意な関連は見られず、きょうだい間においては、長子・次子の性別やその構成が攻撃的な反応を示す要因にはならないことが明らかになった。今回得られたサンプルにおいて、長子・次子ともに男女比に大きな差はなく、次子に嫉妬して攻撃をしたり、今までより甘えたり、母親にあたりたりといった反応は、性差やきょうだい構成に関係なく、どの子どもにも見られる可能性のある反応のようである。

長子と次子の年齢差については、いずれの群においても有意な主効果は見られなかった。葛藤反応の項目を見ると、退行するという点で発達段階に関連する項目はいくつか存在するが、特定の年齢でなくては見られない反応は「おむつがとれていたのに又おもらしをする」という項目のみである。そのため、各年齢差群において差が見られなかったのではないだろうか。

フラストレーション・トレランスについて、低群と高群に分けてt検定をおこない、葛藤反応得点との関連を検討したところ、有意な差は見られなかった。これまでに幼児の気質と葛藤反応との関連について検討をおこなった先行研究は見当たらないが、長子の葛藤反応は、外的な環境要因だけでなく内的要因、つまり、幼児自身の持つ気質が強く影響しているのではないかと予想した。特に、フラストレーション・トレランスの高い長子は、自分の欲求や思いを抑え、表に出さないのではないかと予想したが、分析の結果、フラストレーション・トレランス低群・高群の間に、葛藤反応得点の有意な差は見られず、フラストレーション・トレランスは葛藤反応の出現そのものに影響するものではないということがわかった。一方、4因子の因子得点との関連をt検定によって検討したところ、「嫉妬」因子以外の3因子（「退行」因子、「アンビバレント」因子、「自己アピール」因子）について、2群間で有意な差が認められた。このことから、フラストレーション・トレランスは、葛藤反応の内容に影響を与えていることが示唆された。「退行」因子、「自己アピール」因子については高群より低群が、「アンビ

バレント」因子については低群より高群が有意に高かった。フラストレーション・トレランスの高い長子は、赤ちゃんに対する攻撃や赤ちゃんと自分を同一視した行動についてはフラストレーション・トレランスの低い長子と同様に示すが、退行的行動や母にあたるといった反応は少なく、赤ちゃんをかわいがるなどの反応を示しやすいことがわかる。「アンビバレント」因子に高い負荷量を示した項目には、次子を肯定的に受けとめる内容の項目のほかに「『赤ちゃんなんか知らない』と言う」という項目があり、フラストレーション・トレランスの高い長子が次子を否定的に受けとめるという可能性がある。しかし、「夜尿がひどくなった」、「おもらしをする」、「よく嘔吐する」など、「退行」因子、「自己アピール」因子に高い負荷量を示す項目のように、母親にとって直接的に「手がかかる」といった反応は少ないようだ。次子出産直後の母親にとって、乳児である次子を世話するだけでも手がいっぱいになることだろう。そのようなときに、長子までもが乳児のように手がかかるとなると、母親の育児への負担はさらに大きなものとなるだろう。フラストレーション・トレランスが高い長子は、このような母親にとって直接的に負担となる反応は少なく、母親にとって「『赤ちゃん返り』はするものの、あまり手がかからない」というような印象を受ける可能性がある。戸田⁶⁾は、幼児の気質が母親の育児感や育児ストレスと関連があることを報告しており、幼児の気質と関連のあることが示された葛藤反応がこうした育児感・育児ストレスと関連があるということは十分に考えられる。また、「アンビバレント」因子のみフラストレーション・トレランス高群が低群より有意に高かったことに関しては、「アンビバレント」であるということは、抑制や我慢を必要とするということが考えられる。「赤ちゃんなんか知らない」という思いを抱えながらも、親の期待にこたえようと「お兄ちゃん・お姉ちゃんらしく」振る舞うという葛藤があり、次子に対する否定的な思いを一時的に抑制・我慢することで、「赤ちゃんを可愛がる」などの肯定的な反応を示すことができるのではないか。「アンビバレント」因子は、全面的に次子を受け入れるということではなく、次子に対して否定的な思いを抱えつつも、時には次子の存在を受け入れ、肯定的に接するという因子であり、こうした観点からも、葛藤反応は抑制や我慢との関連が強いと考えられる。

反応の激しさについて、低群と高群に分けてt検定をおこない、葛藤反応得点との関連を検討したところ、有意な差は見られなかった。反応の激しさの高い

長子は、フラストレーション・トレランスとは対照的に、自分の欲求や思いを表に出しやすいのではないかと予想したが、分析の結果、反応の激しさ低群・高群の間に、葛藤反応得点の有意な差は見られず、フラストレーション・トレランス同様、反応の激しさは葛藤反応の出現そのものに影響するものではないということがわかった。一方、4因子の因子得点との関連をt検定によって検討したところ、「アンビバレント」因子のみ、2群間で有意な差が認められた。このことから、反応の激しさも、フラストレーション・トレランスと同様に、葛藤反応の内容に影響を与えていることが示唆される。「アンビバレント」因子に関して、フラストレーション・トレランスでは高群が低群より有意に高かったのに対し、反応の激しさでは高群より低群の方が有意に高かった。「嫉妬」因子、「退行」因子、「自己アピール」因子については、有意な差は認められなかった。反応の激しさ高群と低群では、いわゆる「赤ちゃん返り」とされるような、次子の出生を受け入れられずに示すネガティブな反応は、2群どちらも同じように示すようである。しかし、「アンビバレント」因子に高い負荷を示した「赤ちゃんを可愛がる」などの肯定的な反応については、反応の激しさ高群では有意に低く、反応の激しさの高い長子は、次子に対する思いを否定的な反応で表出することが多いようだ。上述したように、「アンビバレント」因子は、長子が否定的な感情と肯定的な感情のどちらも抱いているということを示す因子である。反応の激しさが高い長子は、次子に対する否定的な自分の思いをストレートに表に出すため、いつもは否定的な感情を抑制し次子をかかわるが、時にその感情が溢れ「いらない」と言う、というような両面性のある複雑な反応は少ないのではないだろうか。つまり、反応の激しい長子ほど、複雑な葛藤を抱える両面性に揺れ動くことは少なく、自分の思いを直接的に表出していると考えられる。ただし、他の3因子（「嫉妬」因子、「退行」因子、「自己アピール」因子）については有意差が見られず、反応の激しさの高い長子も低い長子と同様に、嫉妬や退行などの反応を示し、思いを表出しているということがわかる。

6. 総合考察

長子にとっては、退行や攻撃、「赤ちゃん返り」や肯定的反応などのすべての反応が、葛藤の表れであると言える。次子の出生によってもたらされた親子関係の危機を、様々な反応によって表現しているようだ。

特に、「アンビバレント」反応は、次子という突然目の前に現れた存在を何とか受け入れようとする、長子の葛藤そのものである。長子にとって、この葛藤自体が、新たな家族や家族システムを受け入れ、親子関係を再構築しようとする過程であり、次子の出生による危機状態を乗り越えるための、非常に重要なはたらきであると言える。そして、長子はどのような反応を見せたとしても、今の自分を親に受けとめてもらいたいと願っているのだと思われる。ポジティブな反応もネガティブな反応も見せながら、自分自身が次子を受け入れられるか試行錯誤すると同時に、親が今までのように自分を愛してくれるかを試しているのである。しかし、ポジティブな反応はそのまま親に受けとめられ、ほめてもらいやすいが、ネガティブな反応は親の負担となり、受け入れてもらえないことも考えられる。母親が、肯定的反応は歓迎だが「赤ちゃん返り」は避けたい、という考えのもとに長子に接すると、長子が否定的な反応を示したときに負担を感じ、それが育児ストレスにつながる恐れもある。これまで述べてきたように、長子は次子の出生によって様々な変化があり、様々な反応を示すが、それは長子の葛藤の表れであり、長子なりに今の状況を受けとめようと努力している証であることとらえることで、母親の葛藤の感じ方も変わってくることだろう。

一般に「赤ちゃん返り」と言われている現象は、次子出生をきっかけとした長子の変化ととらえると、実に多岐にわたる反応があることがわかる。因子分析の結果からもわかるように、「退行」に関する項目も「赤ちゃん返り」に関する様々な反応の一部を説明するものに過ぎない。言葉による表現が未熟な幼児は、様々な姿を見せることで、自分の思いをなんとか表現しようとしているのではないだろうか。次子出生をきっかけに始まる長子の変化は、長子の葛藤の表れそのものであると言えよう。葛藤が起きるということは、つまり、葛藤を起こすことで、今の状況を幼児なりに受け入れようと努力しているということである。長子にとって、次子の出生は危機状態に陥る要因であるが、次子の誕生がもたらすものは必ずしもそればかりではない。自分なりに葛藤を抱えながらも、それを乗り越えて、新しい家族や家族システムを受け入れていくことが、長子自身の成長につながるのである。そこで重要となるのが、この長子の葛藤が、両親によって受けとめられるか否かである。次子の出生は、長子にとって、外的にも内的にも非常に大きな変化をもたらす。この変化を受けとめるため、葛藤は長子にとってとても重要な手続きである。その中で、時には、泣

いたり怒ったり、親の愛情を確かめるような行動を取ったりと、親にとっては煩わしいと思うような反応をすることがあるかもしれない。次子が生まれたばかりで世話に追われる母親にとっては、長子がお兄さん・お姉さんらしく振る舞ってくれることで、ずいぶん楽になるだろう。しかし、長子の示した葛藤から目を背けてしまうと、長子は「今までは自分だけを愛してくれていたのに、赤ちゃんが来たら、自分のことはどうでもよくなったのだ」などと感じる可能性がある。それは、今まで築かれた親子の信頼関係を壊すだけでなく、弟妹への敵対心や嫉妬心を抱かせ、その時点でのきょうだい関係や家族システムにも影響を及ぼすだけでなく、長子自身の人格形成にも悪影響を与えられられる。これらの問題が長期化すると、長子については、家族に対する不信感が他者への信頼感形成に悪影響を与え、社会性の問題へと発展することが考えられる。また、両親についても、育てにくさから虐待などに問題が発展することも考えられる。葛藤は、次子が生まれたという、現在の状況を受け入れるまでの一時的なものである。それを、長子への愛情を持って受けとめることで、長子は自分なりに葛藤を乗り越えていくことができるのではないだろうか。

7. 引用文献

- 1) 磯崎三喜年：(出生順位と性がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響), 国際基督教大学学報, II -B, 社会科学ジャーナル61, 203-220, 2007
- 2) 天富美禰子：(同胞葛藤に関する研究：次子出生に対する長子の反応と同胞関係), 大阪教育大学紀要II, 社会学・生活科学31 (2/3), 175-187, 1983
- 3) 小口忠彦：新教育心理学基本用語辞典, 明治図書, 1982
- 4) 天富美禰子：(同胞葛藤に関する研究：次子出生による長子の反応と桶の養育態度との関連), 大阪教育大学紀要II, 社会科学・生活科学32 (2/3), 145-157, 1984
- 5) 菅原ますみ・島 悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則：(乳幼児期にみられる行動特徴：日本語版ITQおよびTTSの検討), 教育心理学研究42 (3), 315-323, 1994
- 6) 戸田須恵子：(幼児の気質と母親の育児観及び育児ストレスとの関係に関する研究), 北海道教育大学紀要, 教育科学編52-2, 2002
- 7) 富田久枝：(きょうだい関係と嫉妬心), 児童心理62 (8), 807-811, 2008
- 8) 張 含：(子どもの攻撃行動の性差：自然観察と教諭評定による), 臨床心理学研究34, 96, 2008
- 9) 依田 明：きょうだいの研究, 大日本図書, 1990

次子出生における長子の変化としての葛藤反応

—— 長子や次子の性別・年齢差・気質との関連から ——

The conflict responses of the elder child related to the born of the younger child

—— The analysis of the influence of sex, age difference and temperament of elder sibling ——

深澤 怜紗*・岩立 京子**

Reisa FUKASAWA, Kyoko IWATATE

幼児教育学分野

Abstract

When the second child was born, an elder brother or sister behaves like the babies and completely depends on parents or shows aggressive behavior to the younger children. These kinds of behavior are called “regression” and seem to be caused by conflict between negative feeling like jealousy and positive emotion to the younger child. And it seems a defense mechanism to get the secure attachment back with his/her mother.

We find the big individual difference of these conflict responses. The aim of this study is to clarify the influence of sex of siblings, age difference and the temperament on conflict responses of the elder sibling by implementing the questionnaire to 146 mothers.

We found four factors of the conflict response by the factor analysis and named each factor 1) jealousy, 2) regression, 3) ambivalence, 4) self-appeal. The ambivalence points of elder girls show significantly higher than that of elder boys. The lower group of frustration-tolerance gets significantly higher points of self-appeal and the lower group of behavioral severity gets significantly higher points of ambivalence.

These results show that sex and the temperament of elder siblings affect conflict responses, and verify our hypothesis.

Key words: siblings, regression, conflict responses, sex of siblings, temperament

Department of Early Childhood Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 長子は、次子の出生時に、赤ちゃんに戻ったように振る舞ったり、下の子に対する攻撃などを示したりすることがある。このような、いわゆる「退行」は、下の子どもへの上の子どもの嫉妬などのネガティブな感情と、かわいさなどのポジティブな感情の葛藤から生じる反応であると考えられる。また、母親との愛着が不安定になったときなどに安定に戻すための防衛機制ともいわれている。

このような「赤ちゃん返り」を、親は困った行動ととらえがちであるが、一般的には多くの子どもにみられるものであり、退行することによって、自らの葛藤反応を表現し、親に理解してもらったり、ケアを引き出したりする手がかりを与えると考えられる。

* Tokyo Gakugei University, Graduate School of Education.

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

この葛藤反応は個人差が大きい。そこで、本研究は、146名の母親を対象に質問紙調査を行い、次子出生に伴う長子の葛藤反応の要素を明らかにすること、そして、きょうだいの性別、年齢差、長子の気質によって、葛藤反応がどのように違うのかを検討することを目的とした。

因子分析の結果、葛藤反応は4因子から構成され、それらは1.嫉妬因子、2.退行因子、3.アンビバレント因子、4.自己アピール因子と命名された。

女兒は男児より、アンビバレント因子得点が高かった。年齢差と葛藤反応の間には有意な差がみられなかった。また、長子について、フラストレーション・トレランスが高い群より低い群の方が、退行因子得点や自己アピール因子得点が高かった。反応の激しさ得点が低い群の方が、高い群よりもアンビバレント因子得点が高かった。

この結果から、きょうだいの性別や長子の気質が、葛藤反応に影響していることがわかった。

キーワード: きょうだい、赤ちゃん返り、葛藤反応、性別、気質